

特別養護老人ホーム入居者家族が抱く罪悪感と家族支援に関する研究

著者名(日)	井上 修一
雑誌名	人間関係学研究 : 社会学社会心理学人間福祉学 : 大妻女子大学人間関係学部紀要
巻	18
ページ	1-11
発行年	2016
URL	http://id.nii.ac.jp/1114/00006374/

特別養護老人ホーム入居者家族が抱く罪悪感と家族支援に関する研究

Treatment Approaches for Sense of Guilt of Families in Nursing Home Residents

井上 修一 *
Shuichi INOUE

<キーワード>

特別養護老人ホーム, 入居者家族, 罪悪感, 家族支援

<要 約>

本研究では、特養入居者家族が抱く罪悪感を調べ、何に起因するものかを検討した。入居者家族が抱く罪悪感を自由記述からみると、【入居前】の《葛藤》《心残り》、【入居後】の《自責の念》、《申し訳なさ・負い目》、《後ろめたさ》、《不自由さ》、《世間体》等の複雑な感情と捉えることができる。それらは、「本人の言動に起因」したり、「家族の規範意識・役割意識に起因」することがわかった。特養入居者家族は、身内の入居前には、もう少し一緒にいられたらと考え、入居後は、自分がお世話できないことを申し訳なく思うことがある。それは、入居者（身内）の言動や自らの役割意識、規範意識によって引き起こされる。こうした罪悪感は、時間の経過と共に消えるわけではなく、12年以上経っても持ち続ける家族の存在が明らかになった。そして、介護経験がある家族ほど、身内を施設に預けることに罪悪感を抱く傾向にあった。さらに罪悪感を持つ家族は、職員に教えてほしいことがある。罪悪感をもつ入居者家族は、入居者（身内）と関わりたいと考えているものの、これでよいのか確信が持てずにいる。関わり方は様々でありながら、家族が持つ不安を解消し、家族関係を維持し、継続できる支援が必要となる。

家族は、日々ケアしてくれている職員が、施設を訪れた際に、挨拶をし、快く迎えてくれることに安心する。職員も、面会の機会をとらえ、家族に安心してもらえるような情報を提供したり、あたたかなケアの姿を見せたりする。家族は、入居者の意欲的な言葉、笑顔、食欲の増加や体重変化等を知り、安心する。

特養の援助者の役割として、入居者と家族をつなぎとめたり、絆を深めたり、家族全体をケアし、エンパワメントする役割がある。そのために、入居者、家族とコミュニケーションをとりながら、心理状態を見極めるとともに、入居者と家族を「結びなおす」ケア、さらには、家族同士をつなぐ役割が求められる。

はじめに

施設入居は、本人のみならず家族にとっても安心できるものでなければならない。しかし、福祉サービスを利用することは、本人や家族をささえるものである一方、入居者家族のなかには、身内を施設に預けることで罪悪感を抱く者がいる。本研究では、特別養護老人ホーム（以下、特養）の入居者家族を対象として、家族が抱く罪悪感について検討した。その際、罪悪感を抱く場面、時期を設定し、それらと家族の属性、同居経験、介護経験の関連を調べた。

福祉サービスの利用と家族が抱く罪悪感との結びつきは単純ではない。当然、我々が提供するサービス水準を上げる必要もあろう。その一方、入居者と家族の間で生じる不安、葛藤、ためらい、申し訳なさといった複雑な感情もみられる。これらの感情がどのように罪悪感と結びついているか見定めながら、特養入居者家族に対する必要な支援を考えていきたい。

1. 研究の目的

認知症高齢者の主介護者は、入所サービスを利用することで体が楽になったという思いを持つ一方、家で介護したいが看られないことや預けてよかったのかといった葛藤を抱くことが報告されている⁽¹⁾。先行研究によって罪悪感を抱く家族の存在は指摘されながらも、それは、何に起因するのか、これまで十分議論されてこなかった。

本研究では、特養入居者家族が抱く罪悪感を調べ、何に起因するものかを検討した。先行研究では、施設入居後に、親族の認知症の進行に伴い、関わり方がわからなくなって面会を控える家族の存在がわかっている⁽²⁾。先行研究では、家族に対してもっと入居者と関わってほしいという指摘がみられる。しかし、家族が何に思い悩み、不安を感じ、どのようなささえを必要とするかといった記述はみられない。

施設には、認知症を抱える本人へのケアにとどまらず、本人と家族の関係をつなぎなおしていく

役割がある。そのことに着目することで、施設ケアが、入居者と家族を包み込みながら、家族全体をケアしていくことにつながる。

我々は、入居者と家族が安心して生活を継続できるケアをめざす。施設ケアが、入居者と家族の関わりを支援することで、施設入居後も家族とともに老いることを感じるができると考えている。

2. 研究の対象と方法

(1) 調査対象者：

G県内の特別養護老人ホーム133施設（2013年8月現在）の中で、家族会と相談のもと、家族調査に協力できるという意思表示のあった5施設に対して、質問紙による調査を行った。調査期間内において定例の家族会に参加した208名に対して調査を行った。

(2) 研究の方法

実施期間は、2013年12月1日～2014年2月28日である。調査方法は、自記式質問紙による郵送調査を実施し、回収率は、59.1%（123名）であった。

分析方法として、質問紙の定量的分析と自由記述の質的内容分析をおこなった。記述内容を分析し、罪悪感の背景にある感情を【入居前】と【入居後】、(本人の言動に起因するもの)と(家族の規範意識・役割意識に起因するもの)に分けて整理した。

(3) 倫理的配慮

本調査は無記名であり、回答項目についても、個人が特定されない内容で構成されている。また、調査の依頼文に、個人や施設が特定されないこと、回答結果は本調査以外では使用しないことを明記し、調査票の返送をもって同意が得られたものとした。また、協力施設に対し、調査結果を報告し、内容の確認をしてもらうこととした。

3. 結果

回答者の内訳は、男性 43 名 (34.7%)、女性 80 名 (64.5%) で、平均年齢は 62.04 歳であった。

入居している方との関係は、子が 79 名 (63.7%)、子の配偶者が 17 名 (13.7%)、次いで配偶者 6 名 (4.8%)、きょうだい 6 名 (4.8%)、その他 15 名 (12.1%) という結果であった (図 3-1)。

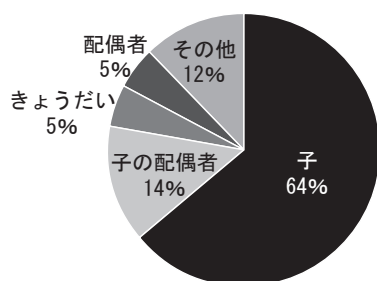


図 3-1 回答者の属性

同居経験の有無を尋ねたところ、同居していた親族は 65 名 (52.8%) で、同居していなかった親族 58 名 (47.2%) を若干上回った (図 3-2)。

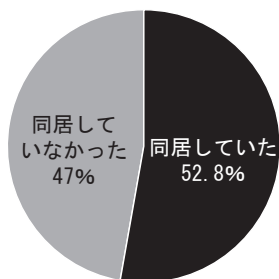


図 3-2 同居経験

また、在宅介護をしていた親族の割合は、75 名 (61.5%)、していなかった親族は 47 名 (38.5%) であった (図 3-3)。

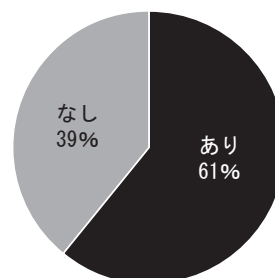


図 3-3 介護経験の有無

入居者の平均入居年数は 3.95 年であった。

家族を施設に預けたことに対して罪悪感を抱いていると回答した親族は、38 名 (31.9%) であった (図 3-4)。

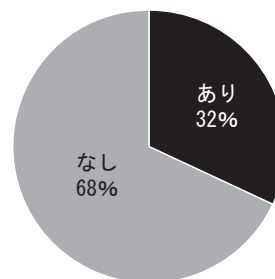


図 3-4 入居者家族が抱く罪悪感の有無

「入居者と思うように関わっているか」という設問に対しては、107 名 (91.5%) が「できている」と答えている。

一方、職員に教えてもらいたいことがあると回答した者は、45 名 (41.7%) であった (図 3-5)。

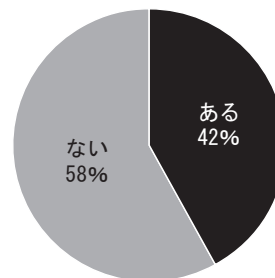


図 3-5 職員に教えてもらいたいことの有無

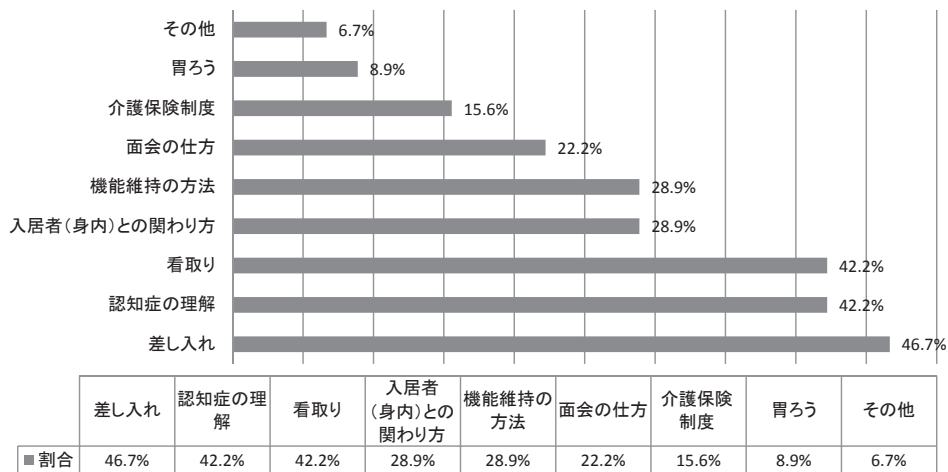


図3-6 職員に教えてもらいたいことの内訳

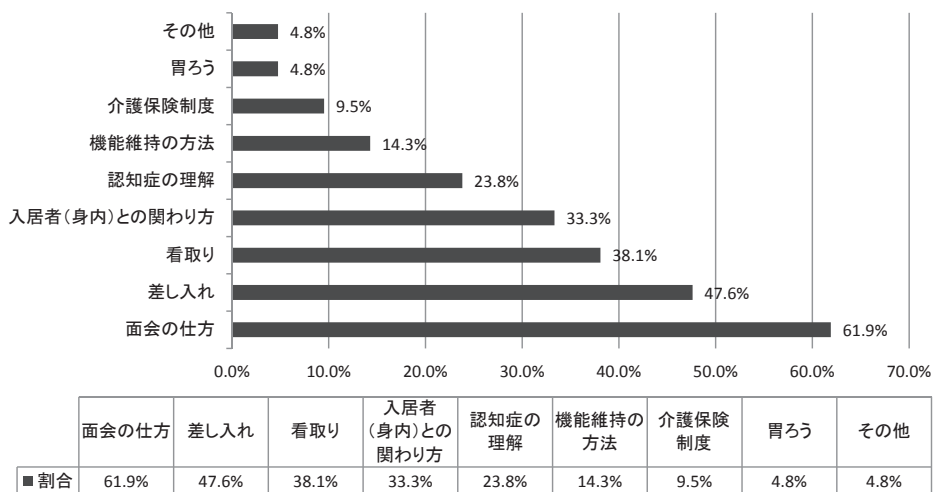


図3-7 他の入居者家族に聞いてみたいことの内訳

職員に教えてもらいたいことを複数回答で尋ねたところ、最も多かったのは「差し入れ」について21名、次いで「認知症の理解」19名、「看取り」について19名、さらに「入居者との関わり方」13名、「機能維持の方法」13名という結果であった(図3-6)。

同様に、他の入居者家族に聞いてみたいことの有無について尋ねたところ、あると回答した者は、21名(20.8%)であった。複数回答で尋ねたところ、最も多かったのは、「面会の仕方」13名、次いで「差

し入れ」10名、さらに「看取り」8名という順であった(図3-7)。

これらから窺えるのは、家族は入居者と関わりながらも、差し入れの仕方、身内の認知症の症状に苦慮しているのではないかということ。さらに、身内との関わり方、面会の仕方において悩んだり、改善の余地があると考えていると推察された。また、看取りについてもポイントが高かった。身内が亡くなることを意識し、職員からアドバイスをもらいながら看取っていきたいと考えていること

が窺えた。

一方、他の入居者と情報交換したいという希望については、42.5% (48人) が、したいとこたえている。他の入居者家族に聞いてみたいことのトップは、面会の仕方であった。同じ境遇の家族同士で一番関心のある事項が面会の仕方であり、さまざまな悩みが面会の場面で発生すると推察される。面会では、同じ入居者家族だからこそ聞いてみたいこと、共有したいことがあると考えられた。

介護経験と罪悪感の間には有意差が認められた ($p < .05$)。つまり、介護経験がある者ほど、罪悪感を抱きやすいことがわかった (図3-8)。

罪悪感のポイントが高かったのは、子 (35.4%)、次いで配偶者 (33.3%)、子の配偶者 (31.3%) であったが、それぞれの差はわずかであり、家族の属性と罪悪感の間には相関は認められなかった。同様に、同居経験と罪悪感の間にも有意差は認められなかった。

罪悪感と職員に教えてもらいたいことの関連をみたところ、罪悪感のある家族ほど、職員に教えて

もらいたいことがあるとこたえていた ($p < 0.01$)。また、他の入居者家族に教えてもらいたいことがあるとこたえている ($p < 0.001$) (図3-9)。

罪悪感を抱く家族を入居後3年ごとにまとめて調査したところ、必ずしも時間の経過とともに罪悪感がなくなるわけではないことが明らかになった ($p < .05$)。さらには、入居後12年以上経っても罪悪感を持ち続けている家族の存在が明らかになった (図3-10)。

施設内に相談できる入居者家族の有無について尋ねたところ、「いる」と答えたのは29名 (25.4%) であった。

「他の入居者家族と情報交換したい」という項目については、48名 (42.5%) の家族が「そう思う」と答えている。

家族会への参加状況については、「参加していない」家族が22名 (18.5%)、「ときどき参加している」49名 (41.2%)、「毎回参加している」48名 (40.3%) という結果であった (図3-11)。

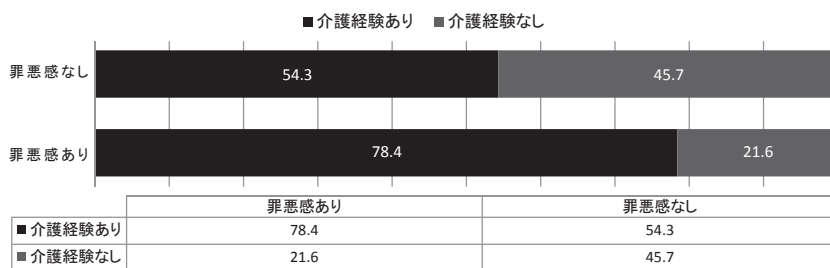


図3-8 罪悪感と介護経験との関係

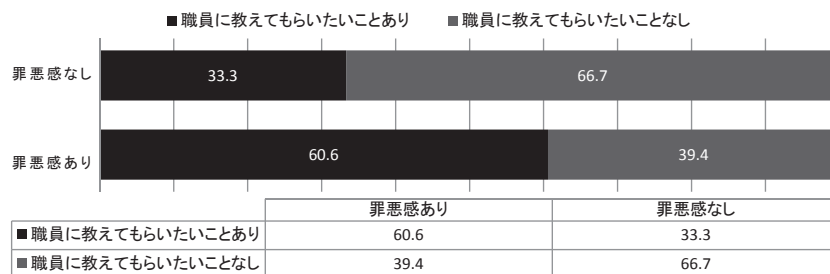


図3-9 罪悪感と職員に教えてもらいたいことの有無との関連

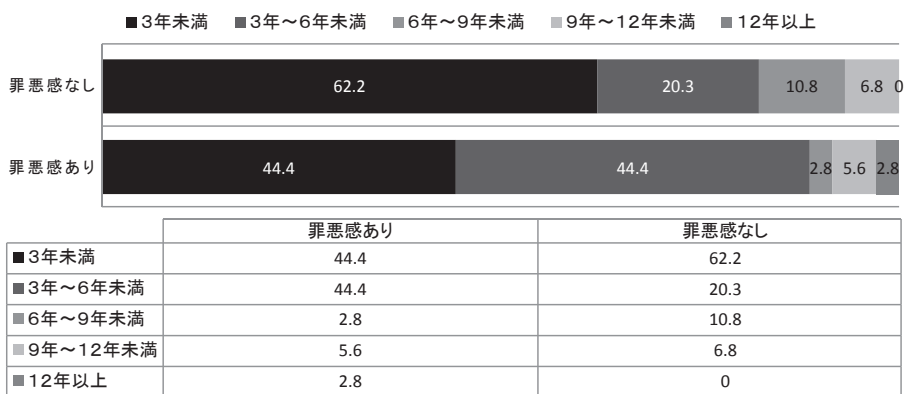


図 3-10 罪悪感と入居年ごとの比較

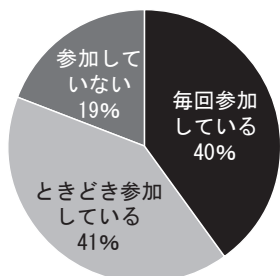


図 3-11 家族会への参加頻度

面会の際、安心することを尋ねたところ、職員
の挨拶（92名）が最も多く、次いで、入居者の身
体的・精神的状態の好転を感じた時（71名）、入
居者に関して援助者から説明を受けること（71
名）、入居者本人の言葉の確認（45名）、その他（13
名）であった（図 3-12）。

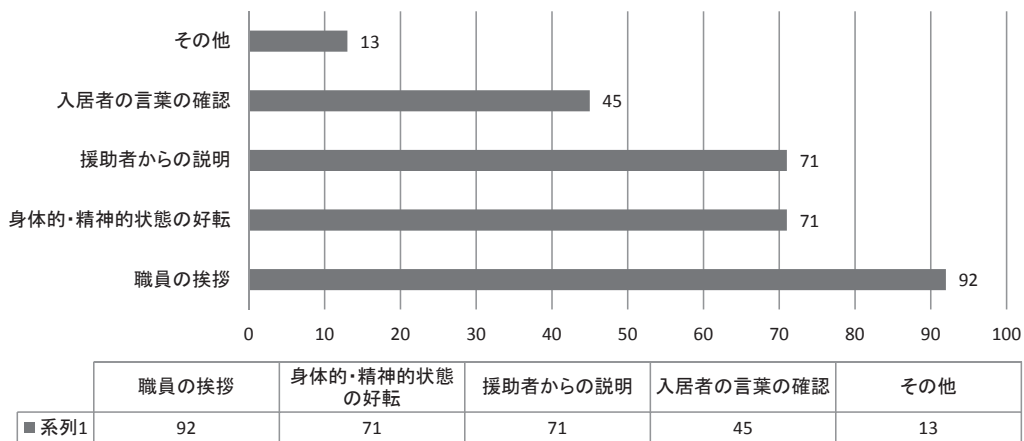


図 3-12 面会の際、安心することの種類

罪悪感の種類と場面（図3-13）

入居者家族が抱く罪悪感を自由記述からみると、入居前の場面で抱くもの、入居後に抱くもの、さらに、本人の言動に起因するもの、家族の規範意識・役割意識等に起因するものに分けられた（図3-13）。

【入居前】

《葛藤》 本人の言動に起因するもの

(例)

- ・ 5年前に独居での生活が無理だと判断して施設を探したときに、本人が入居するのを嫌がったときには、家族も辛かった。現在は施設での生活にすっかり慣れて、家族はありがたと感謝している。

《心残り》 家族の規範意識・役割意識に起因するもの

もう少し一緒にいられたらよかった、面倒をみたかった、自分にできることがあったと考える家族がいる。それらは、家族意識、役割意識に起因する考えであると推察できる。

(例)

- ・ もう少し一緒に居られたら良かったのに、でも見てあげられない事情もあり。また、私自身も体が丈夫だったらと、夜になると辛くなります。
- ・ 入居すると決まった時に、もっと心良く面倒を見てやれたかと申し訳なさを感じた。
- ・ もう少し自分で出来ることがあったかも、と思う時がある。
- ・ 入所が決まったとき思ったこと。ショートの中で入所が決まり、もう少し時間があれば好きなものを食べさせてあげたり、何かしらしてやれたことがあったのではとすごく思ったのを今もまだ思うことがある。
- ・ もう少しの間できたかと思う。また家に少しの間つれて行ってやりたいと思う時があった。いまはもう話せない、動けないとどうしようもないが、何か思い出さないかと思うこともあった。

【入居後】

《自責の念》 本人の言動に起因するもの

施設を訪問した際、入居者（身内）から「帰りたい」「外出したい」と言われ、その願いが叶えられないことによる自責の念を抱く家族がいる。また、入居者（身内）から「体に気を付けて」「無理するな」と、いたわりの言葉をかけてもらい、逆に申し訳なく感じる家族がいた。

(例)

- ・ さみしいと言った時に、自責の念、申し訳なさを感じる
- ・ 家に帰りたいと訴えられても、叶えてあげられないとき
- ・ 家に帰りたいといったときです。
- ・ 面会して帰るとき、母の顔を見ると、なんとも言えない気持ちになります。
- ・ 面会終わって帰るときに泣いて家へ帰りたいと言った時に辛かった
- ・ 置いて行くなよと言われたとき。出会って帰るとき、一緒に連れて行ってよって言われたとき。私に体を気をつけて無理するなよって言われたとき。
- ・ 外出したいと言われて、連れていけないとき、申し訳なく感じる。
- ・ 認知症があまりないので、元の生活に戻りたいという時

《申し訳なさ・負い目》 家族の規範意識・役割意識に起因するもの

面会に来た家族は、入居者（身内）が周りの人に気遣って本当の自分を出せていない姿を目の当たりにしたとき、職員が一生懸命介護をしているのを見たとき、本来、自分がお世話をすべきであったのではないかと申し訳なく思う。入居者家族は、日常のさまざまな場面で罪悪感や申し訳なさを感じるが、その背景には、親の面倒は本来子どもが見るべき等の規範意識や役割意識があると推察された。

(例)

- ・ 会いに来たとき、自分が世話をしていないことに申し訳ないと感じます。

- ・入居した頃、入居者が周りの人に気を使って、本当の自分を出せていない姿を見たときに、申し訳ない気持ちでいっぱいになっていました。今は「こんな体やで家では無理」と言われると、逆に帰りたいんだろうなと思うと、申し訳ない気持ちになります。
- ・4人兄弟で男ばかり。誰も親の面倒を見れないようでは情けない。しかし、今までが一人暮らしのため一緒に住んだ場合は無理がある。現状のままでよい。
- ・本当は自分が母親の面倒をみるべきなのにできない罪悪感がある。職員の皆さまが一生懸命親身になってお世話してくださる姿に頭が下がりますし、申し訳なさを感じる。
- ・施設の方が一生懸命面倒をみてくださっても（ありがたいと思っています）自分の親だから身内の者がやはり面倒をみてあげるべきではないかと、自分がだんだん年をとってきたためかふっと思ふときがあります。
- ・私たちの年代では親は長男夫婦で最後までみとるということを言われてきました。私もそのような考えがおおいにありました。しかし、いまは考え方も変わってきているし、負い目は感じなくても良いと思います。私は主人の親2人も家でみとっている分、自分の親もと思うことも時々ありましたが、いまは割り切っています。
- ・弟の家族と同居していましたが、負担になるし、弟も見る気がなかったので、入居してもらいました。24時間見ていただけることや級長設備も整っているの、その点は安心ですが、孫やひ孫との接触もほとんどないのがさみしいと思い、申し訳なく思います。
- ・長年一緒に暮らしよく頑張って働いて家庭を守ってくれた人でした。私は何もしてやれなかった。現在は明日は我が身とつくづく思います。
- ・同居したことがないこと。
- ・しばらく面会に来られなかったとき。自分で在宅療養できない。
- ・いつも思います。

《後ろめたさ》

知り合いが自宅で家族を介護していると知った時、施設に親を預けた自分と比較して、後ろめたさを感じる家族がいる。

(例)

- ・自分達が支障なく普通の生活ができている時に、申し訳なさを感じます。自宅で介護してみえる人の話を聞くときに、面倒をみてあげていないことに後ろめたさを感じます。
- ・知り合いの同年の方々を見たとき、申し訳なく感じるときがあります。
- ・家族で介護をしてみえる方を見たとき
- ・職場の仲間たちの中に家族で世話してみえる方と話しているとき、自分たち将来も不安に感じます。施設で世話していただくことは本当にありがたいと思います。そのおかげで自分たちも生活していけるのではと思います。ありがとうございます。
- ・自分で見てやりたい気持ちはあるが、私の体を心配してくれる。家族（親戚）の気持ちとの入り混じった時など。母より重度の方の世話をしていらっしゃる方を見たとき。

《不自由さ》

施設は集団生活であるため、自由に、気ままに行動したり、好きなものを食べたりすることが許されない和家人は感じることもある。入居者（身内）の不自由さを見るにつけ、自宅で暮らせないことに罪悪感や申し訳なさを感じる家族がいる。

(例)

- ・自宅でくつろがせることができない時
- ・自由に動けなくて気ままさが無いかな？
- ・トイレを気にしているとき（すぐにいけない時）、好きなものを食べさせたいと思う時、来訪して話をしていると記憶がだんだん鮮明に戻ってくる時（たびたびきて話をするといいなと思う時）
- ・大切に育ててもらったからいい。普段は今の施設に満足しているので思いませんが、たまにふつと元気で一緒に生きられたらなと思います。

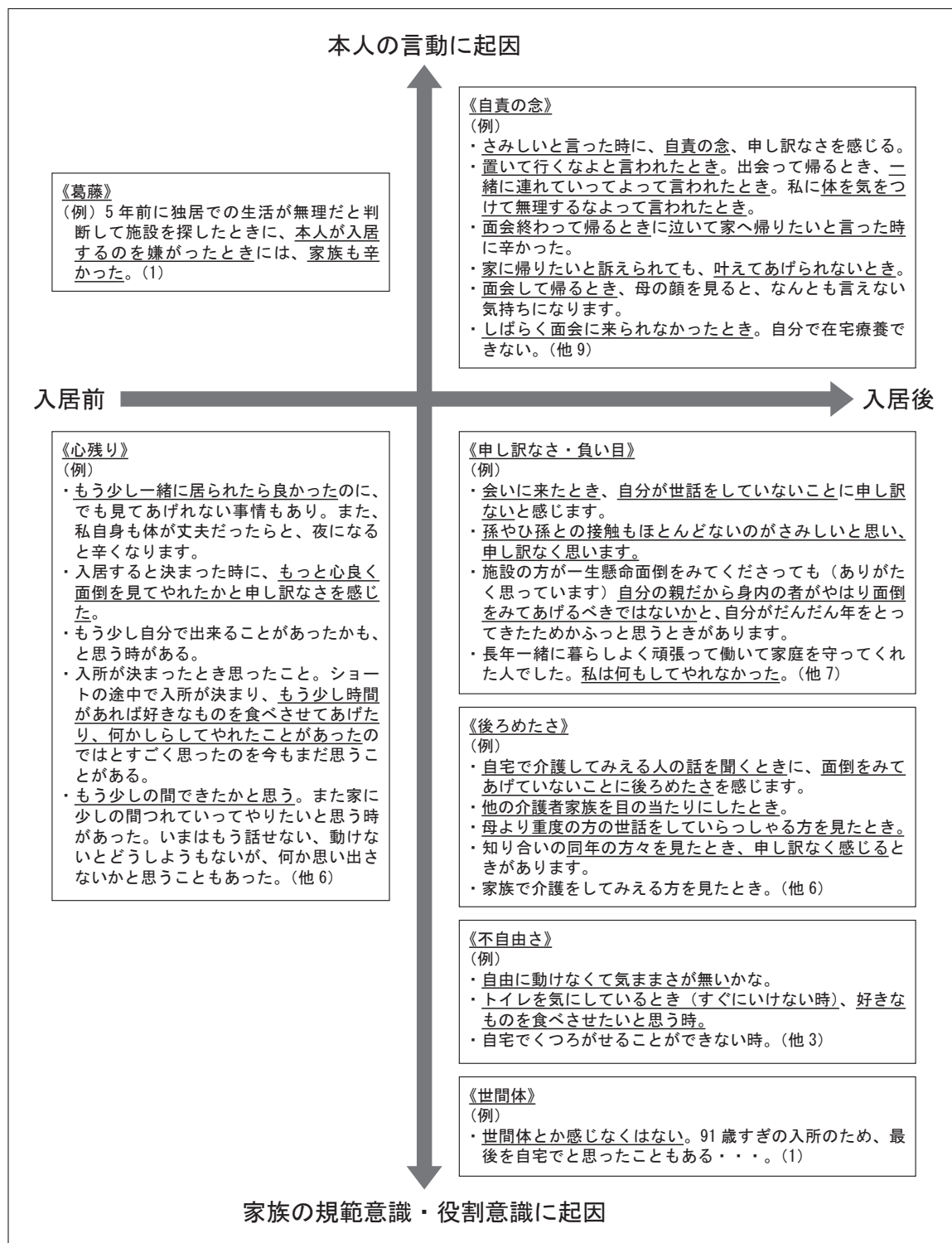


図3-13 特養入居者家族が抱く罪悪感に関する自由記述内容と布置

《世間体》

90歳を過ぎての入居になったことを周りがどのように思っているのか、世間体が気になりながら、最期まで自宅で過ごせなかったと感じ、申し訳ないと思う家族がいる。

(例)

・世間体とか感じなくはない。91歳すぎの入所のため、最期を自宅でと思ったこともある・・・

まとめると、特養入居者家族が抱く罪悪感には、【入居前】の《葛藤》《心残り》、【入居後】の《自責の念》、《申し訳なさ・負い目》、《後ろめたさ》、《不自由さ》、《世間体》等の複雑な感情と捉えることができる。それらは、「本人の言動に起因」したり、「家族の規範意識・役割意識に起因」することがわかった。

4. 考察

特養入居者家族は、身内の入居前には、もう少し一緒にいられたらと考え、入居後は、自分がお世話できないことを申し訳なく思うことがある。それは、入居者（身内）の言動や自らの役割意識、規範意識によって引き起こされる。こうした罪悪感には、時間と共に消えるわけではなく、12年以上経っても持ち続ける家族の存在が明らかになった。

そして、介護経験がある家族ほど、身内を施設に預けることに罪悪感を抱く傾向にあった。さらに罪悪感を持つ家族は、職員に教えてほしいことがある。たとえば、差し入れの仕方、認知症の理解、看取り方など、入居者（身内）との関わり方について模索していることがわかった。同様に、他の入居者に聴いてみたいと思う傾向が強かった。職員には認知症の理解等、専門的ケアについて尋ねたいという意向があり、一方、他の家族には、日々の面会の仕方等を聴きたいという違いが窺えた。

いずれにしても、罪悪感をもつ入居者家族は、入居者（身内）と関わりたいと考えているものの、これでよいのか確信が持てずにいる。関わり方は

様々でありながら、家族が持つ不安を解消し、家族関係を維持し、継続できる支援が必要となる。その手がかりが、今回の調査から明らかになった。

罪悪感には、自らの行動を修正する側面がある⁽³⁾。いわば、入居者家族は、施設入居に伴う罪悪感を緩和しようとするプロセスのなかで、もがいている。罪悪感は複雑な感情を背景にもつため単純ではない。

援助者は、入居者家族が自らの罪悪感を和らげ、身内と良好な関係を維持していくために、主体的な関係形成を支援することが重要である。

家族は、日々ケアしてくれている職員が、施設を訪れた際に、挨拶をし、快く迎えてくれることに安心する。職員も、面会の機会をとらえ、家族に安心してもらえるような情報を提供したり、あたたかなケアの姿を見せたりする。家族は、入居者の意欲的な言葉、笑顔、食欲の増加や体重変化等を知り、安心する⁽⁴⁾。

そう考えると、罪悪感を抱く家族を支援することは、むしろ施設入居後の関係を主体的に修復し、形成していくチャンスとも考えられる。罪悪感を抱いた家族は、自宅でも介護をしていた経験が多い。それは、自らもつと介護できたのではないかという心残りにつながる。そのため、我々は、面会の場面等を通じて家族をあたたかく迎え、関わりながら、罪悪感を抱いた家族を見逃さず、家族と入居者の関係をささえていく必要がある。そして、入居者、家族とコミュニケーションをとりながら、複雑な心理状態を見極めてささえるとともに、入居者と家族を「結びなおす」ケア、さらには、家族同士をつなぐ役割が求められる。

おわりに

特養の入居前後で、家族は入居者との関係づくりや自分の役割について、考え、悩み、もがいている。特養の援助者の役割として、入居者と家族をつなぎとめたり、絆を深めたり、家族全体をケアし、エンパワメントする役割がある。援助者もそれをわかって模索してきた。

身内の認知症の症状が進み、日々衰える姿をみ

るのは、家族としてもつらい。身内に会うことをためらう家族がいてもうなずけよう。本当は入居者（身内）に関わりたいたいと思いつつ、ためらう場合、ちょっとしたささえがあれば関わることがある。

ケアの場が在宅から特養へと移っても、家族関係が維持され、悔いのないように関わってほしい。そのような願いのもと、調査をしてきた。調査は罪悪感を抱えた家族の姿の一端を明らかにしたにすぎない。これからも、援助者と連携しながら、分析を続けていきたい。

注

- (1) 島田広美・天谷真奈美・星野純子他（2002）. 痴呆性高齢者を介護する主介護者の入所サービスの利用に対する思い，老年看護，33,196-199.
- (2) 井上修一（2010）. 特別養護老人ホーム入居者家族が抱く迷いと緩和に関する研究，大妻女子大学人間関係学部紀要，12, 11-20.
- (3) 久崎孝浩（2002）. 恥および罪悪感とは何かーその定義，機能，発達とはー，九州大学心理学研究，3, 69-76.
- (4) 井上修一（2010）. 前掲書，11-20.

【参考文献】

- 石川隆行（2010）. 児童の罪悪感と学校適応感の関連，発達心理学研究，21（2），200-208.
- 井上修一（2010）. 特別養護老人ホーム入居者家族が抱く迷いと緩和に関する研究，大妻女子大学人間関係学部紀要，12, 11-20.
- 井上修一（2011）. 特別養護老人ホーム入居者家族への支援方法：STAIによる家族会活動の評価，大妻女子大学人間関係学部紀要，13, 109-115.
- 奥山朝子，大高麻衣子，河部チヨ，東海林仁志（2009）. 低体重出生児で出生した脳性まひの小児を持つ母親の受容過程と求めるサポート，日本赤十字秋田看護大学・日本赤十字秋田短期大学紀要，（14），43-51.

島田広美・天谷真奈美・星野純子他（2002）. 痴呆性高齢者を介護する主介護者の入所サービスの利用に対する思い，老年看護，33,196-199.

橋本多恵，庄司一子（2010）. 中学生の罪悪感機能に関する検討：罪悪感特性と学校適応感の関連について，日本教育心理学会総会発表論文集，（52），442.

久崎孝浩（2002）. 恥および罪悪感とは何かーその定義，機能，発達とはー，九州大学心理学研究，3, 69-76.

岸恵美子（2002）. 性役割意識が介護サービス利用に及ぼす影響，日本女性心身医学会雑誌，7（2），226-237.

